

平成 28 年 9 月 21 日

箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点 現地説明会資料

九州大学埋蔵文化財調査室

所在地 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学箱崎キャンパス  
中央図書館地区・中央図書館前南地点 (図 1・2)  
調査面積 約 120 m<sup>2</sup>  
調査年月日 平成 28 年 8 月 22 日～10 月 14 日 (予定)

## 1. 遺跡の位置と環境について

九州大学箱崎キャンパスは、箱崎遺跡の一部にあたります。博多湾の沿岸には箱崎砂層とよばれる古砂丘が形成されており、その砂丘上に博多遺跡群、吉塚遺跡群、堅粕遺跡群、箱崎遺跡群などが立地します。箱崎遺跡はこの南北に長い砂丘の北端部に位置し、東側は宇美川、西側は博多湾、北側は多々良川に挟まれた位置にひろがっています。

箱崎遺跡では、福岡市教育委員会による発掘調査が何度も実施されており、<sup>はこぎきぐう</sup>管崎宮の創建時期とされる 10 世紀前半から中世を中心とした期間に存続した集落遺跡が残されていることがわかっています。至治 3 (1323) 年に中国・寧波から博多に向かう途中で沈没した韓国・新安沖発見の交易船から、「<sup>しち</sup>管崎」銘の<sup>ニンポー</sup>荷札木簡が様々な積荷とともに引き上げられています。箱崎は博多遺跡群と並び、日元貿易においても日本の主要な交易拠点となっていたようです (榎本 2008)。

## 2. 発掘調査の成果 ―南北に延びる<sup>いしづ</sup>石積み<sup>いこう</sup>遺構の発見― (写真 1・2・3・4)

今回調査したのは、箱崎キャンパスの中央図書館南側の 2 地点です。防音講義室側の調査区 (西地区) の地表下約 1.3m において、石積み遺構 (幅約 1.3m、現高約 0.9m) が見つかりました。この石積みは、南北方向 17m 以上にわたって直線的にのびています。

石積みは、一番下段の部分とみられる長さ 40～70 cm の石材が、西側 (博多湾側) に面を揃えて 20 石以上並んでいます。もともとの場所から動いた痕跡は、ほとんどありません。大型石材の西側の面を丁寧に加工し、平坦面が作られています。あいだに角礫を詰め込んで、石材を 3 段ほど積み上げた部分も一部に残っています。また、石積みから約 2 m の範囲内の黄褐色砂層中に、こぶし大～人頭大に砕かれた石片が散在していま

した。これらは、石積みの隙間に詰め込んだ裏込石うらごめいしであると考えられます。後代の人為的な攪拌かくはんや樹木の根などによる攪拌を強く受けて、もともとあった位置から散乱したものとみられます。大型石材には主に礫岩れきがんの角礫、裏込石には礫岩・砂岩さがんが用いられています。

なお、石積みの周囲から土器の破片が少量発見されました。しかし、石積みに伴うといえるような出土状況ではありませんでした。出土遺物から、この石積み遺構がつくられた年代を推定することはまだ難しいところです。

しかし、今回見つかった石積み遺構は、所在する場所や立地、構築方法などから、元寇防塁げんこうぼうれいの一部である可能性が高いといえます。元寇防塁であるとすれば、国内に残っている類例のなかでも残存状況が非常に良いものです。学術的な価値も高く、構築の方法や築造分担の特色などを把握することができる可能性を秘めています。全貌を明らかにするためには、今後さらなる検討が必要となります。

### 3. 元寇防塁とは？

元寇防塁げんくいは、文永11(1274)年の蒙古襲来もうこしゅうらい(文永の役えき)の後に鎌倉幕府の指示により、九州各国の分担で博多湾岸に総延長約20kmにわたって築造されました(図3)。高さ約2~3m(いろいろな説があります)の石築地いしつじです。築造の分担は西から、今津地区が大隅・日向国ながたれ、長垂地区が豊前国、生の松原地区が肥後国、姪浜地区が肥前国、博多地区は筑前・筑後国、箱崎地区は薩摩国さつま、香椎地区は豊前国となっており、領主の所領(土地の面積)に対して一定の長さが割り当てられました。

昭和6年3月30日に、今津、今山、長垂、生の松原、向浜、脇、百道、西新、地行、地藏松原の10地区が国史跡に指定されました。さらに、昭和56年3月16日に今津地区の一部が追加指定されました。

#### ○箱崎地区の元寇防塁について

石堂川(御笠川)と多々良川の河口を結ぶ約3kmが、薩摩国が築造を担当した箱崎地区です。元寇防塁の築造は、建治2(1276)年3月ごろから始まり、同年8月には一応の完成をみたとされていますが、箱崎地区の場合、建治3(1277)年や弘安7(1284)年に石築地を築造したという文献史料があり、建治2年には全部が完成せず、築造が継続したとされています。箱崎地区の元寇防塁については中山平次郎氏(当時、九州帝国大学医科大学・教授)により、九州大学医学部構内(グラウンド横)から箱崎網屋の墓地、九州大学旧工学部、農学部構内を抜けて地藏松原墓地にいたる微高地の上に立地すると推定されました(中山1914ほか)。地形的な観点から、那珂川の河口東岸から

多々良川の河口までの地区は、防塁が嚴重に築かれた可能性が指摘されています（大塚 2013）。

地蔵松原地区では大正 9（1920）年、武谷水城氏<sup>たけやみずき</sup>によって全長約 8 m の発掘調査が行われ、石列高は 60.6～106.1 cm、石列幅は 60.6～72.7 cm であり、石材は大きいもので幅 84.8 cm、高さ 30.3 cm、厚さ 45.5 cm のものがあると報告されています（武谷 1922）（写真 5）。

また福岡市教育委員会の発掘調査により、平成 5 年に九州大学農学部演習農場（地蔵松原防塁）、平成 12 年に JR 鹿児島本線軌道下（元寇防塁跡第 9 次調査）でも元寇防塁の一部と考えられる石材の散布が確認されています（図 4）。

### 参考文献

- 井上繭子 2008 「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社，48-51 頁
- 榎本義嗣 2008 「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎（編）『中世都市・博多を掘る』海鳥社，52-55 頁
- 大塚紀宜 2013 「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史—特別編』自然と遺跡からみた福岡の歴史 福岡市，302-317 頁
- 武谷水城 1921 「多々良以東元寇防塁有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』第 24 集 筑紫史談会，32-41 頁
- 武谷水城 1922 「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地蔵松原発掘の石塁」『筑紫史談』第 25 集 筑紫史談会，33-36 頁
- 中山平次郎 1914 「宮崎の防塁」『筑前史談会講演集』第 1 輯 筑前史談会，51-79 頁
- 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（編）2000 「0035 元寇防塁跡第 9 次調査（GKB-9）」『福岡市埋蔵文化財年報 VOL. 15 平成 12（2000）年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課，52-54 頁
- 柳田純孝 1988 「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二（編）『よみがえる中世 1』東アジアの国際都市 博多 平凡社，180-194 頁



図 1 調査地点の位置 (S=1/25, 000)

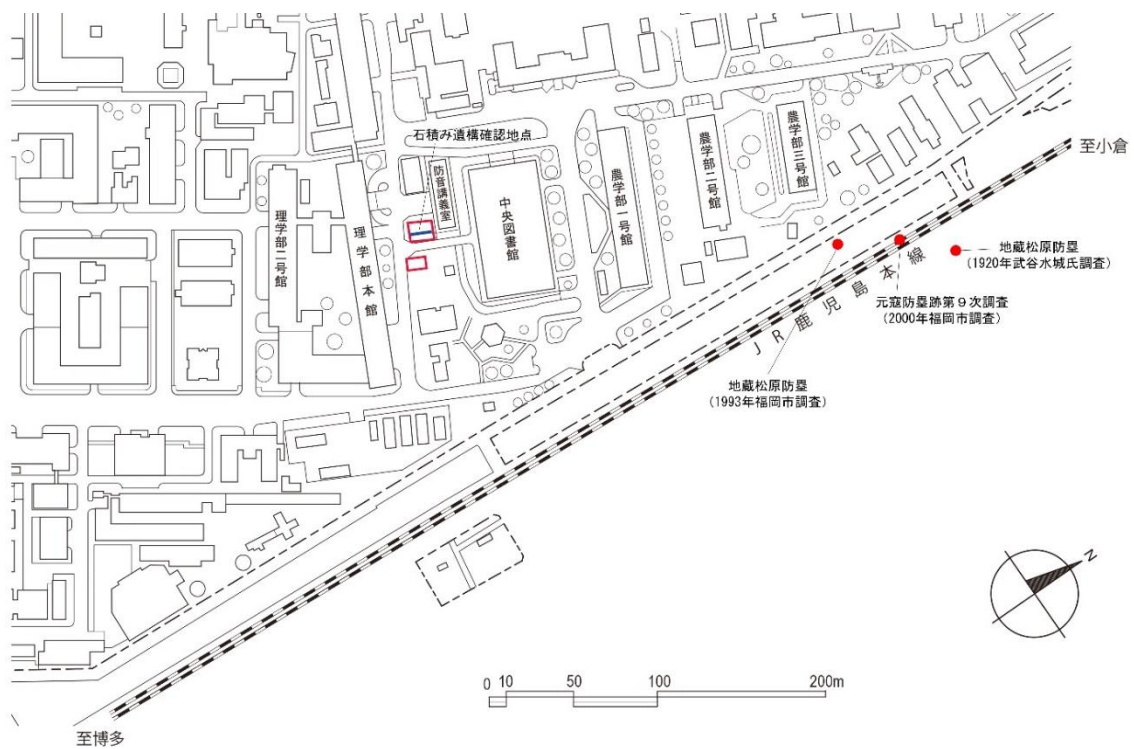


図 2 調査地点の位置と石積み遺構の確認地点





写真1 石積み遺構検出状況（北東から）



写真2 石積み遺構検出状況（北から）





写真3 北側拡張区石積み遺構検出状況（南西から）



写真4 石積み遺構細部の状況（北西から）





図3 元寇防塁の位置と調査地点（井上 2008 を一部改変）



写真5 地蔵松原における元寇防塁検出状況（大正9年）（武谷 1921）



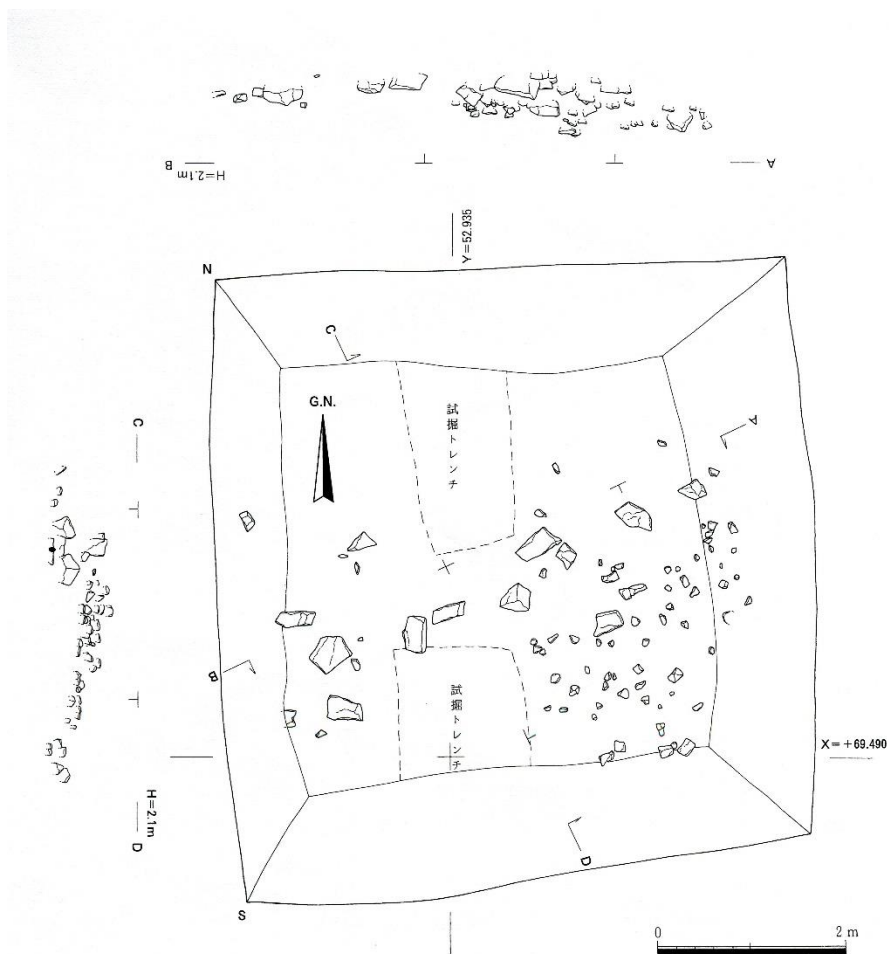


図4 元寇防塁跡第9次調査 調査区平面図 (S=1/80)  
(福岡市教育委員会埋蔵文化財課編 2000)



図5 『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の石築地 (宮内庁三の丸尚蔵館蔵)